

# 同窓生が語る宮澤賢治

## 盛岡高等農林学校と古川仲右衛門教授と宮澤賢治 (12)

若尾 紀夫 (C昭39・院41)

古川仲右衛門教授。この名前を聞いて「賢治の恩師、あの先生のことか!」と思ひ浮かべる人は、どの位いるのだろうか。賢治は、得業(卒業)論文の中に2人の名前を挙げている。1人は古川仲右衛門教授、もう1人は関豊太郎教授である。何れも賢治の恩師であり、強い影響を受けた人物である。

関豊太郎教授は開校早々(明治38年)に赴任し、大正9年に西ヶ原農事試験場に転出するまで土壌・地質・岩石・鉱物・気象などを教授、我が国における土壌学分野の権威であった。賢治は盛岡高農に入学して関教授と運命的な出会いをし、生涯恩師として教授を尊敬していた。関豊太郎教授に就いては、今まで様々な場面で多く語られている。



関豊太郎 教授

古川仲右衛門教授は、賢治が入学する前年(大正3年)に肥料学教授として赴任、やがて賢治の得業論文を指導し学問の恩師となる。ところが、古川仲右衛門教授に就いては、今まで殆ど語られることはなかった。何故なのか?古川仲右衛門教授とはどのような人物か?など色々と疑問が湧き、教授に就いてもっと知りたいと思うようになり、

そして今まで知らなかったことが次第に分かってきた。ここでは、古川仲右衛門教授の生い立ちから盛岡高農赴任以前、盛岡高農教授時代、盛岡高農退職後、新たに分かった古川教授出身の岐阜と賢治との関わりなどについて述べる。

### 誕生から静岡県立農学校時代まで

#### 誕生から東京帝国大学農科大学 (明治11年7月~明治38年7月)

古川仲右衛門は、明治11(1878)年7月、岐阜県海津郡城山村(現・岐阜県南濃町羽沢)で代々名主を務める旧家古川家の長男として誕生した。明治31年、大垣中学校(現・大垣北校)を卒業したが、中学校1年生の時「大垣青年会誌」に載せられた作文「秋夜虫を聞く」を読むと、その若い感性と文学的才能が感じられる。

「三伏の熱既に去り一葉の桐亦秋を報ず一夜天晴れ風清し余時に書齋にあり夏深くして門前人絶え環堵蕭然唯唧々たる草間の蟋蟀を聞くのみ此に於て心神忽悲哉の境に入る或は既往を慨し或は将来を嘆し寸心百断復書を繙く能はず而して自ら其凄然たる所以を原るに苦しむ起ち窓を開けば一輪の明月天に輝き我が真如を照すに似たり」

中学校を卒業した古川仲右衛門は、第3高等学校に進学し、更に学問を深めるために上京を決意した。父親は古川家の跡継ぎである一人息子の上京に大反対であったが、明治35年4月に東京帝国大学農科大学(農芸化学科)に無事合格(24歳)、明治38年7月には同大学を卒業(27歳)し、晴れて農学士(農芸化学)として船出することになる。

#### 福岡県立農事試験場時代 (明治39年6月~明治42年10月)

東京帝国大学農科大学卒業後、明治39年6月、最初の赴任地である福岡県立農事試験場に技師として勤務。在任中は主に「甘藷からアルコールを生成する研究」に取り組んだ。

## 静岡県立農学校時代 (明治42年10月～大正3年9月)

明治42年10月、古川仲右衛門は、静岡県立農学校(3年課程)(現・静岡県立磐田農業高等学校)教諭として勤務(31歳)、遠州中泉(現・磐田市中泉)に居をかまえた。同農学校では、化学・土壌・肥料・土地改良・植物生理等の科目を担当した。また、研究心旺盛で「地元静岡茶(野澤茶)の製法の改良と普及」にも尽力した。その澤野茶は好評を博したが、現在は後継者が絶えていると言われる。

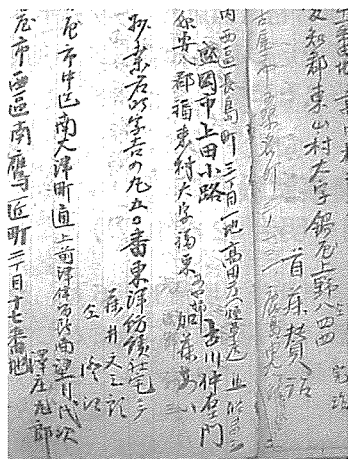
## 盛岡高等農林学校時代

### 古川仲右衛門教授の就任

農学科第2部・肥料学教室の大杉 繁教授は、大正3年10月22日に大原農業研究所化学部長として転出(依願免本官)、同年10月に、後任として静岡県立農学校の古川仲右衛門教諭(36歳)が教授として就任し、土壌及肥料・化学・分析化学・同実験・農学大意を担当する。赴任した時は上田与力小路(現・盛岡市上田1丁目)の借家に入居したと思われる。



古川仲右衛門 教授



古川仲右衛門教授の上田住所

ところで、古川仲右衛門教授が赴任した大正期、盛岡高農はどのような状況であったのか、参考のため説明しておこう。東北の一地方都市にすぎない岩手・盛岡の地、そこに我が国初の高等農林学校が創立され、多くの新進気鋭の教授達が集合、

全国各地から来た向学心溢れる若者達に当時最先端の学問が教授された。当時の盛岡高農のキャンパスは“イーハトーブの空間”であった。

## 創設から明治45年までの盛岡高農



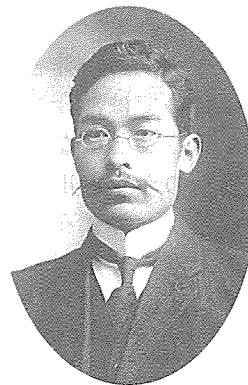
玉利喜造 初代校長

創立から明治末までの10年間は、盛岡高農の体制整備期で、教官陣容・研究・教育施設などのハード・ソフトともに急速に整備充実された。開校当初は、玉利喜造初代校長を中心に9名の教授で構成されていたが、明治41年までには教授17名・助教7名・講師9名まで飛躍的に拡大された。第2代校長となる佐藤義長教授は明治36年、賢治の恩師土壌学の関豊太郎教授は明治38年、ビタミンB<sub>1</sub>を発見した鈴木梅太郎教授は明治39年、納豆の研究で有名な村松舜祐教授及び肥料学の大杉 繁教授は明治42年に、次々と赴任してきた。明治43・44年には、新たに教授3名・助教4名・講師3名が参加した。



鈴木梅太郎 教授

盛岡高農の体制としては、明治42年に至って事務処理上農学科が第1部と第2部に分かれて4学科体制となり、農学科第1部は大森順造教授、第2部は関豊太郎教授、林学科は上村勝爾教授(後の第4代校長)、獣医学科は田村補三郎教授がそれぞれ部長に就任した。



村松舜祐 教授

明治43年に玉利喜造初代校長(鹿児島県出身)は新設の鹿児島高等農林学校の初代校長として盛岡を去り、佐藤義長教授が第2代校長に就任。このように創設からほぼ10年、大正初期までには盛岡高農の教官陣容の基盤がほぼ確立された。

## 農学科第2部・ 農芸化学科の独立と学内環境の整備

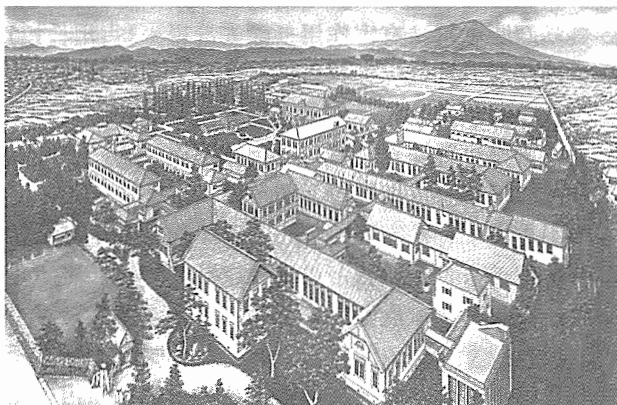
大正2年4月から農学科第2部が分離、学生募集も独立して行なわれることになり農芸化学科の基礎ができ、関豊太郎教授が第2部長に就任した。その後5年間農学科第2部の時代が続き、大正7年4月からは学則改正により農学科第1部は農学科、第2部は農芸化学科となり、ここに名実共に農芸化学科が誕生することになる。

主だった教授陣容としては、先にも触れたが、大正3年10月に大杉 繁教授が退職し、後任として古川仲右衛門教授が就任。駒場農科大学の鈴木梅太郎教授は、毎年夏に来盛し、植物栄養論の集中講義と全校生徒を対象とした特別講演を行なってきたが、大正6年12月には兼任が解除された。

当時は、教授の留学が盛んに行なわれた。関連する教授としては、鈴木梅太郎教授は明治34年10月から明治39年2月まで約4年間、独に留学し、帰国直後の5月に盛岡高農に赴任。佐藤義長教授は明治38年から3年間、独・仏に、吉村清尚教授は明治42年から3年間、伊・独・米国に留学。関豊太郎教授は、明治43年12月、独に留学し大正2年5月に帰国。大正4年2月には村松舜祐教授が2年間の予定で米国に留学、大正6年6月に帰校した。

教授の移動もあり、大正9年9月には関豊太郎教授が西ヶ原農事試験場に転出、同年10月に後任として長谷川米蔵教授（土壌学・地質学）が着任した。大正10年7月には古川仲右衛門教授が、同年10月には佐藤義長第2代校長が退職している。

施設関連としては、大正中頃までに本館（現・農業教育資料館）、農芸化学科実験棟（第5教舎）、農産製造舎、酪農舎、ハム製造舎、林産製造舎等の建物が次々に新築され、盛岡高農のキャンパスはほぼ完成型となった。



大正中頃の盛岡高農全景

## 大正期の教官陣容と担当学科目

賢治3年（大正6年）の農学科第2部の教官と担当学科目を挙げると次のようになる。

- ・関豊太郎教授：物理及気象、鉱物及地質、土壌
- ・佐藤義長教授：農産製造
- ・鈴木梅太郎教授：植物栄養論（集中講義）
- ・村松舜祐教授：留学中（大正6年2月に帰国）
- ・古川仲右衛門教授：土壌及肥料、化学、分析化学、同実験、食品化学、農学大意
- ・玉置適教授：外国語
- ・神野幾馬助教授：物理、化学、同実験、農産製造
- ・恒藤規隆講師：肥料製造
- ・山辺英太郎講師：国文
- ・黒野勘六講師：細菌学、農産製造実験



農学科第2部の分析化学実験風景（大正5年）  
古川仲右衛門教授（中央の白衣）、宮澤賢治（左端後方）

## 古川仲右衛門教授の研究業績

古川仲右衛門教授が在職中に発表した研究論文は「加里及曹達の定量に就て」（校友会報 第35号、1-13：大正6年12月27日発行）である。

その研究目的は「加里（K）と曹達（Na）を他の諸成分から分離定量するため、従来汎用されてきた塩化白金法と新たに用いられている過塩素酸法とを比較検討することである」と述べ、肥料3要素の一つである加里の定量の問題を取り上げている。その実験内容は、筆者もその一人であるが、化学的知識がないと充分理解できない。古川教授は、主に土壌及肥料・化学・分析化学・同実験・無機化学・食品化学などを教授し、また前任の静岡県立農学校でも化学・土壌・肥料を担当していた。従って、古川仲右衛門教授は農芸化学分野の中でもいわゆる「化学・Chemistry」に関心を持ち、精通していたと思われる。今のところ土壌に直接関係する研究報告は見当たらない。

## 盛岡高農における得業（卒業）論文の取り扱い

学則「試験、得業及称号」（明治43年）によると、「第3学年ノ試験ニ及第シタル者ヲ受験生トシ得業試験ヲ行フ但シ得業試験ニ合格セサル者ニハ再試験ヲ行フコトアルヘシ」、「得業試験ニ合格シタル者ニハ得業證書ヲ授与ス」、「本校得業生ハ其学科ニ従ヒ農学得業士、林学得業士、獣医学得業士ト称スルコトヲ得」。このように、高等農林学校では「卒業」を「得業」と呼び、得業に際しては「得業試験を行ない」、「得業生」は「農学得業士、林学得業士、獣医学得業士」と呼び「農学士」と区別している。

生徒は3年になると各教授に所属し、それぞれ研究課題を与えられ、研究成果は得業論文として提出する。それらの論文は大正時代から昭和初期のものまで岩手大学図書館に保存されている。ところが、得業論文を提出しない生徒もあり、得業生と得業論文の数が一致しないなどから、盛岡高農の学則では得業論文はどのように位置づけられているのか精査した。

盛岡高農は、創立当初から3学期制で、入学年度に対応する学科課程表（授業時間表）がある。授業は共通科目と各学科専門科目からなり、卒業までの各学年各学期の授業時間数（農場実習は無定時）が決まっている。

農学科第2部の学科課程表を調べてみても、得業論文（研究）の項目は記載されていない。大正3年までは「実験及実習：第1学年～第3学年」が掲示されているが、この時間は得業論文には相当しないと思われる。大正4年から大正6年になると、特殊実験（無定時：第3学年の第2学期及び第3学期）の記載がみられ、これが得業論文の時間に対応するのであろう。いずれにしても大正6年まで、学則及び学科課程表に得業論文提出の記載がないにも関わらず、現実には得業論文が書かれている。

農芸化学科が独立した大正7年になると、「第3学年ノ終ニ於テ得業試験ヲ行ヒ若クハ得業論文ヲ提出セシム」とあり、ここで初めて「得業論文の提出」という条文が出てくる。但し、得業論文の提出は必須ではない。学科課程表には明確な履修科目はなく、特殊実験（無定時：第3年の第2学期及び第3学期）が得業研究に相当すると考えられる。

大正14年になると2学期制になり、授業時間表（農芸化学科）には「特殊化学実験（第3年の第2学期・6単位）」とあり、これが得業論文に相当する。但し、「得業試験ヲ行ヒ若クハ得業論文ヲ提出セシム」とあるので、得業論文を提出しなくてもよいことは従来通りである。

このように、学則では得業論文の提出は必須ではなく、得業試験に合格すれば卒業できることになる。

## 得業論文の指導体制

教授が指導する生徒数は、原則的には均等配分のようなものである。その時の教官人事（留学とか病気休職、転出等で教官不在）によって論文指導教授、更に生徒の数が異なり、従って1人の教授が受け持つ生徒数は一定ではない。年によっては、1人の教授が多くの生徒の論文指導を一手に受け持つこともある。2名の教授が指導教官になることも例外ではない。また2名の生徒の共同研究も見受けられる。得業論文は存在するが、指導教官の名前が論文中に記載されていない「指導教官不明論文」もある。得業論文の数が実際の得業生の数より少ないこともあるが、これは得業論文が未提出なのか、紛失したのか、いろいろの理由が考えられる。

## 古川仲右衛門教授指導の得業論文

古川仲右衛門教授は大正3年10月に赴任したので、古川教授が指導した得業論文は大正5年3月卒業（農学科第2部11回生）のものから存在する。以下、古川教授が在職中に係わった得業論文を掲示する。連名の場合には前者が研究課題を教示する主指導教官となる。大正5年から大正8年まで得業論文は16編あるが、大正9年及び大正10年卒業では論文がない。退職が大正10年7月であるので、まだ論文指導の時間的余裕があったが、大正8年及び大正9年には、何らかの理由で得業研究の生徒を受け持っていないと思われる。

◇大正5年卒業（農学科第2部11回生：11名）

古川教授：1名、関教授：4名、古川教授と関教授：2名、関教授と古川教授：1名、指導教官不明：1名、論文不明：2名

- ・ 斎藤民次郎：特殊実験報告一過磷酸石灰ノ混用ニヨリ石灰窒素ノ有害作用ヲ除去シ得一（古川教授）
- ・ 秋山清風：特殊実験報告一硫酸亜母尼亞ノ石灰流出量及揮散量ニ就テ一（古川教授と関教授）
- ・ 宮越古嘉：特殊実験報告一岡山孤児院茶臼原分院耕土分析一（古川教授と関教授）
- ・ 柴田重義：特殊実験報告一土壤ノ石灰要量ノ測定法ニ就テ一（関教授と古川教授）

◇大正6年卒業（農学科第2部12回生：14名）

- 古川教授：5名、関教授：5名、神野幾馬助教授と関教授：1名、論文不明：3名
- ・ 古澤清介：堆肥ノ漏汁ニ就テ一（古川教授）

- ・中尾重一：綿粉ノ肥料的価値（古川教授）
- ・藤原隆人：施肥ト排水中ノ成分トノ関係(古川教授)
- ・奥本理太郎：酸化石灰或ハ硫酸石灰ヲ併用スルコトノ利害ニ就テ（古川教授）
- ・谷村又三郎：本校上台土壤ニ対スル石灰ノ効果及ビ要量ニ就テ（古川教授）
- ◇大正7年卒業（農学科第2部13回生：12名）  
古川教授：2名、関教授：4名、村松教授：3名、古川教授と関教授：1名、論文不明：2名（原勝成・倉島恵）
- ・山本延雄：蠶蛹ノ利用ニ就テノ研究（古川教授）
- ・森本一男：澱粉粕利用方法ニ就テ（古川教授）
- ・宮澤賢治：腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値（古川教授と関教授）
- ・塩井義郎：飯岡山ノ安山岩及其風化産物ニ就テ（関教授）
- ・鶴見要三郎：鹿児島県国分附近春山産火山灰壚母ノ研究（関教授）
- ・細山田良行：国分及出水ノ火山灰ニ就イテ(関教授)
- ・佐々木又治：台湾赭土及南洋紅土ノ物理的並ニ化学的実験（関教授）
- ・成瀬金太郎：清酒及醬油麹菌酵素ニ就テ(村松教授)
- ・河原田次繁：葡萄酒ノ野生酵母ニ就テ(村松教授)
- ・小菅健吉：水飩ニ関スル調査実験成績(村松教授)
- ◇大正8年卒業（農学科第2部14回生：11名）  
古川教授：4名、関教授：2名、村松教授：3名、論文不明：2名
- ・佐々木六郎：醬油粕の肥料的及飼料的価値に就て（古川教授）
- ・南政治：土壤ノ養分吸収力ト保持力トノ関係並ニ施肥後ニ於ケル可溶性ノ変化ニ就キテ（古川教授）
- ・石戸藤一：石灰加用ノ影響ニ就テ（古川教授）
- ・水野甚十郎：蚕蛹ノ利用ニ就テ（古川教授）
- ◇大正9年卒業（農学科第2部15回生：15名）  
古川教授：●名、村松：6名、指導教官不明：1名、論文不明：8名
- ◇大正10年卒業（農芸化学科1回生：13名）  
古川教授：●名、村松教授：7名、神野助教授：2名、伊藤武雄教授：2名、村松教授と庵原良介講師：1名、論文不明：1名

## 古川仲右衛門教授の盛岡高農における活動等

古川仲右衛門教授は、大正3年10月から大正10年7月（36歳～43歳）まで7年間勤務したが、その在任期間は丁度賢治の在学期間と重なっていた。その間、古川教授にとっては、父親の死や家督相続、病氣（推測？）など、必ずしも安楽な時ではなかった

と思われる。殆ど関連資料がないので、ここでは「校友会報」及び「盛岡高農一覽」等で在任中の古川教授関連の記事を調べた。

◇校友会報 第26号（大正3年12月16日発行）

- ・大杉 繁教授：依願免本官（大正3年10月22日）
- ・古川仲右衛門教授（正7位・農学士）：大杉教授後任として就任（大正3年10月）
- ・担当科目：土壤及肥料、化学、分析化学、同実験、農学大意

◇校友会報 第27号（大正4年5月27日発行）

- ・第10回 得業記念写真（大正4年3月20日）：古川教授（写る）
- ・第10回 得業證書授与式（大正4年3月20日）
- ・標本陳列所評議員ヲ命ス（大正3年12月23日）
- ・瓦斯発生器室、給水タンク及付属建物監守ヲ命ス（大正4年3月12日）
- ・細菌及化学実験室、瓦斯発生器室及標本陳列所物品監守ヲ命ス（大正4年3月12日）
- ・生徒訓育商議員ヲ命ス（大正4年3月15日）
- ・細菌学実験室物品監守ヲ命ス(大正4年4月9日)
- ・合格者・官報発表（大正4年4月6日）：農学科第1部（29名）、第2部（13名：賢治合格）、林学科（24名）、獣医学科（23名）

◇校友会報 第28号（大正4年9月18日発行）

- ・標本陳列所主事ヲ命ス（大正4年5月21日）

◇校友会報 第29号（大正4年11月30日発行）

- ・古川仲右衛門教授：記載事項はない。

◇校友会報 第30号（大正5年2月7日発行）

- ・標本室建物監守ヲ命ス（大正4年12月9日）

◇校友会報 第31号（大正5年7月15日発行）

- ・第11回 得業記念写真（大正5年3月18日）：古川教授（写る）
- ・第11回 得業證書授与式（大正5年3月18日）
- ・生徒入学試験委員ヲ命ス（大正5年2月1日）：全委員7名

◇校友会報 第32号（大正5年11月25日発行）

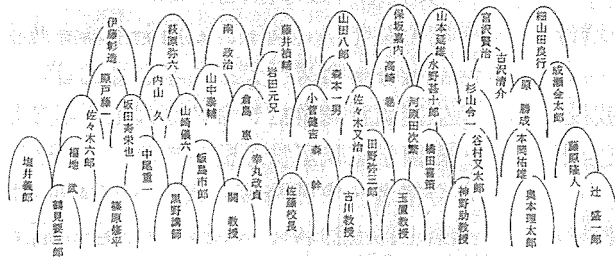
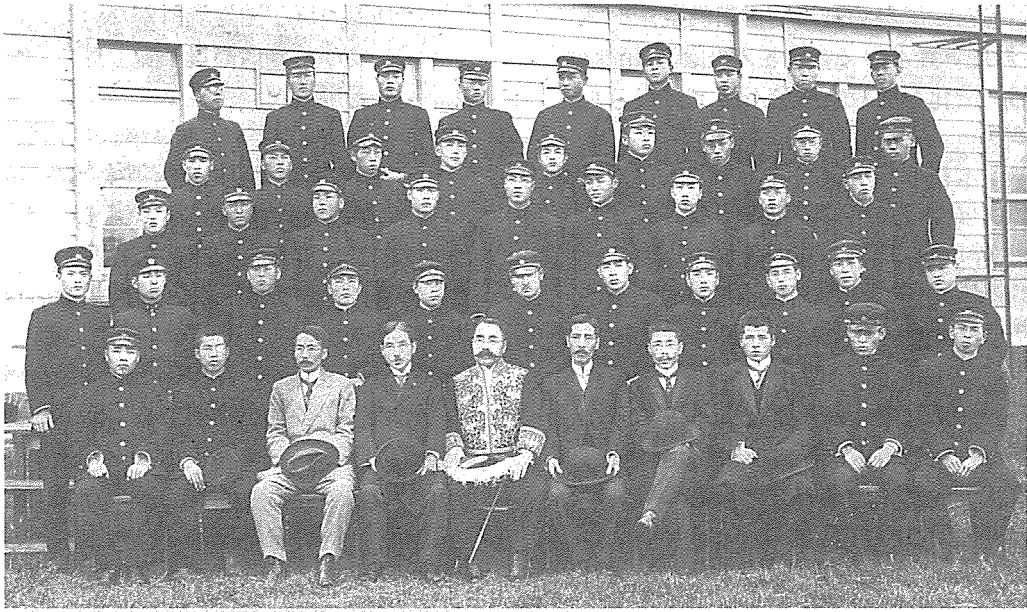
- ・実地指導ノ為山形市へ出張ヲ命ス（大正5年9月30日）
- ・睡叙高等官5等（大正5年10月23日：内閣）

◇校友会報 第33号（大正6年3月16日発行）

- ・叙従6位（大正5年11月20日：宮内省）
- ・生徒入学試験委員を命ス（大正6年2月2日）：全委員7名

◇校友会報 第34号（大正6年7月18日発行）

- ・第12回 得業記念写真（大正6年2月）：古川教授（写る）
- ・第12回 得業證書授与式（大正6年3月17日）
- ・古川仲右衛門教授：記載事項はない。



農学科第2部生徒（1～3年）と教官全員  
（大正6年3月卒業を記念して）

関豊太郎教授（前左4人目）、佐藤義長第  
2代校長（前左5人目）、古川仲右衛門教  
授（前右5人目）、宮澤賢治（最後列右2  
人目）、鈴木梅太郎教授・村松舜祐教授・  
恒藤規隆教授（欠席）

- ◇校友会報 第35号（大正6年12月27日発行）
  - ・学術上取り調ノ為山形県米沢へ出張ヲ命ス（大正6年7月4日）
  - ・学術上取り調ノ為岩手県二戸郡へ出張ヲ命ス（大正6年10月26日）
  - ・研究論文「加里及曹達の定量に就て：1～13頁」を發表
- ◇校友会報 第36号（大正7年7月10日発行）
  - ・鈴木梅太郎教授：依願免兼官（大正6年12月28日：内閣）
  - ・学生入学試験委員ヲ命ス（大正7年1月25日）：全委員8名
  - ・第13回 得業記念写真（大正7年3月）：写真が現存しないため古川教授の所在不明（写る？）
  - ・第13回 得業證書授与式（大正7年3月15日）：賢治得業
  - ・賢治：研究科（農芸化学）入学許可（大正7年3月15日）
  - ・賢治：実験指導補助ヲ囑託ス（大正7年5月10日）
  - ・賢治：実験指導補助ヲ解除ス（大正7年8月24日）
- ◇校友会報 第37号（大正7年12月10日発行）
  - ・物品検閲委員ヲ命ス（大正7年7月4日）：全委員8名
- ◇校友会報 第38号（大正8年6月20日発行）
  - ・第14回 得業記念写真（大正8年3月）：古川教授（不在）
  - ・第14回 得業證書授与式（大正8年3月19日）
  - ・古川仲右衛門教授：記載事項はない。
- ◇校友会報 第39号（大正8年8月10日発行）
  - ・陞叙高等官4等（大正8年5月13日：内閣総理大臣宣）
  - ・実験農場圃場試験部主任ヲ命ス（大正8年6月2日）
  - ・従正六位（大正8年6月30日：宮内大臣宣）
- ◇校友会報 第40号（大正9年7月10日発行）
  - ・第15回 得業記念写真（大正9年2月）：古川教授（不在）
  - ・第15回 得業證書授与式（大正9年3月14日）
  - ・古川仲右衛門教授：記載事項はない。
  - ・「研究生宮澤賢治、末永延壽兩名に対し5月20日研究證書を授与せらる」
- ◇校友会報 第41号（大正9年12月？）：会報の所在不明
- ◇校友会報 第42号（大正10年7月12日発行）
  - ・第16回 得業記念写真（大正10年2月）：古川教授（不在）
  - ・第16回 得業證書授与式（大正10年3月19日）
  - ・古川仲右衛門教授：記載事項はない。
- ◇校友会報 第43号（大正10年12月25日発行）

- ・休職満期（大正10年7月18日）：「休職中の古川教授は7月18日を以て休職満期となれり」
- ・佐藤義長第2代校長：依願免本官（大正10年8月26日）

得業記念写真（第10回～第16回）の内、第14回（大正8年3月）・第15回（大正9年3月）・第16回（大正10年3月）の写真には、古川仲右衛門教授の姿が見当たらない。一大行事である得業記念写真撮影のときに「古川教授が不在」であったということを示している。よほどの事情がない限り写真撮影に欠席することはあり得ない。また大正8年及び大正9年の校友会報には古川仲右衛門教授に関する記事がなく、同年には得業論文専攻の生徒も受け持っていない。

「古川教授は病氣勝ちで、筆稿を学生に代読させて講義に代えたこともあったという。後年休職後退職した。（大矢富二郎）」、「古川先生は大正9年頃には、病弱のためかやはり学校を去っておられます。（宮澤賢治とその周辺：亀井茂）」

古川仲右衛門教授が病氣勝ちであり何時病気で退職したのか、それを証す資料（休職願い等）がないので推測の域を出ないが、古川家の家督相続など家庭の諸事情も重なり、大正8年以降は学校不在が多かったのではないかと推測される。

今回は古川仲右衛門教授が指導した「賢治の得業論文」、古川仲右衛門教授と賢治の作品、盛岡高農退職後の様子、岐阜と賢治との意外な関わりなどについて述べる。

原稿をまとめる当たり、鈴木隆雄氏の「宮澤賢治の恩師—古川仲右衛門の生涯—」、船戸政一氏の「宮澤賢治と岐阜」等、船戸政一氏・吉田昌子氏の「古川仲右衛門年譜」、中野浩氏の研究論文等の多くの資料を参考にさせて頂きました。ここに厚く感謝の意を表します。

## 参考資料

- ・宮澤賢治と岐阜（上）：船戸政一、岐阜新聞（平成11年11月11日）
- ・宮澤賢治と岐阜（下）：船戸政一、岐阜新聞（平成11年11月13日）
- ・古川仲右衛門年譜・古川仲右衛門と宮澤賢治：船戸政一・吉田昌子（平成12年6月5日）
- ・宮澤賢治と古川教授：船戸政一、岐阜県郷土資料研究協議会会報 郷土研究・岐阜 第89号、2-4（平成13年10月15日）

- ・宮澤賢治と岐阜：岐阜史学会代表 船戸政一、NHK岐阜文化センター講座資料（平成16年12月17日）
- ・宮澤賢治の恩師—古川仲右衛門と西美濃、すいとぴあまつぶ N●58、スイトピア友の会 四季報 Vol.78（平成25年10月1日）
- ・宮澤賢治の恩師—古川仲右衛門の生涯—：鈴木隆雄、濃飛の文化財（岐阜県文化財保護協会）第53号（平成26年3月11日）
- ・盛岡高等農林学校一覧（明治36年～大正15年）：盛岡高等農林学校
- ・加里及曹達の定量に就て：古川仲右衛門、校友会報 第35号、1-13（大正6年12月27日）
- ・回顧六十年：岩手大学農学部（昭和37年5月）
- ・宮澤賢治君の思い出（一）：出村（鶴見）要三郎、川原仁左エ門編「宮澤賢治とその周辺」（昭和47年5月）
- ・農芸化学科の歩み：大矢富二郎、大矢富二郎先生退官記念事業会（昭和54年7月）
- ・盛岡高等農林学校と鈴木梅太郎・宮澤賢治：岩手大学農学部農芸化学科内記念碑を建てる会（昭和59年6月）
- ・雨ニモマケズ：宮澤賢治、フォア文庫、岩崎書店（平成2年3月）
- ・大正期盛岡高等農林学校における農芸化学教育—鈴木梅太郎の意図の実現—：中野浩、生物学史研究 62号、21-27（平成11年11月）
- ・「ヤマセ」と宮澤賢治とその周辺：ト蔵建治・平野貢、天気（日本気象学会）50巻（2号）、113-119（平成15年2月）
- ・宮澤賢治と盛岡高等農林学校断片（11）—盛岡附近地質調査と賢治得業論文をめぐる—：亀井茂、早池峯 30号、144-171（平成16年6月）